

青年期の自立について —大学生と社会人の 比較調査から—

安藤ゼミ 15460015 青野法恵

自立について

- ・青年期における発達課題の一つ

- ・日本と海外(欧米)の違い

「国外におけるautonomyやdependenceが親からの独立・分離を強調しやすいのに対して、国内における自立概念は、親を含めた他者との関連性を重視している」(高坂・戸田2006)

→ 自立概念について欧米と日本における文化的自己観の違いを考慮する必要がある

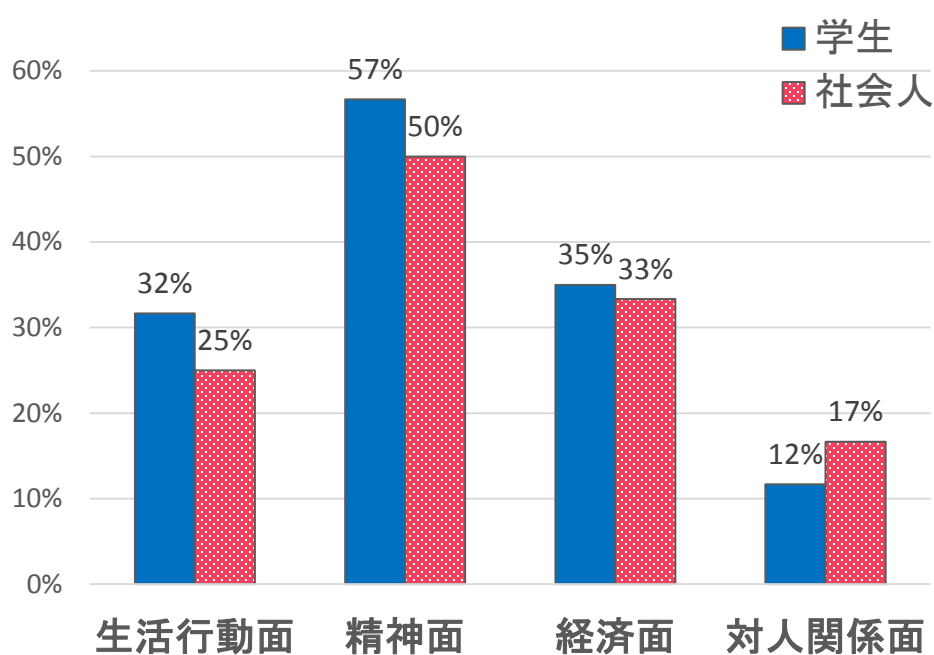
目的

- ・青年期における若者の自立の実態について明らかにするとともに、自立に関する意識面について明らかにする。
- ・青年期が長期化していることに着目し、自立に関する意識や行動において学生と社会人ではどのような違いがあるのか比較する。
- ・日本が相互協調的自己観の文化圏であるということを踏まえつつ、自立と文化的自己観についての関連について調査する。

調査概要

- 【調査期間】 2018年8月31日 ～ 9月22日
- 【対象者】 18歳～27歳の学生及び社会人(回答数:91,
有効回答数:84 大学生60名/社会人24名)
- 【調査方法】 質問紙調査
- 【質問紙構成】
- ・属性に関する項目
 - ・自立尺度についての質問(35項目)
 - ・自立意識に関する項目(2項目、自由記述)
 - ・他者との関わり方に関する質問(20項目) など

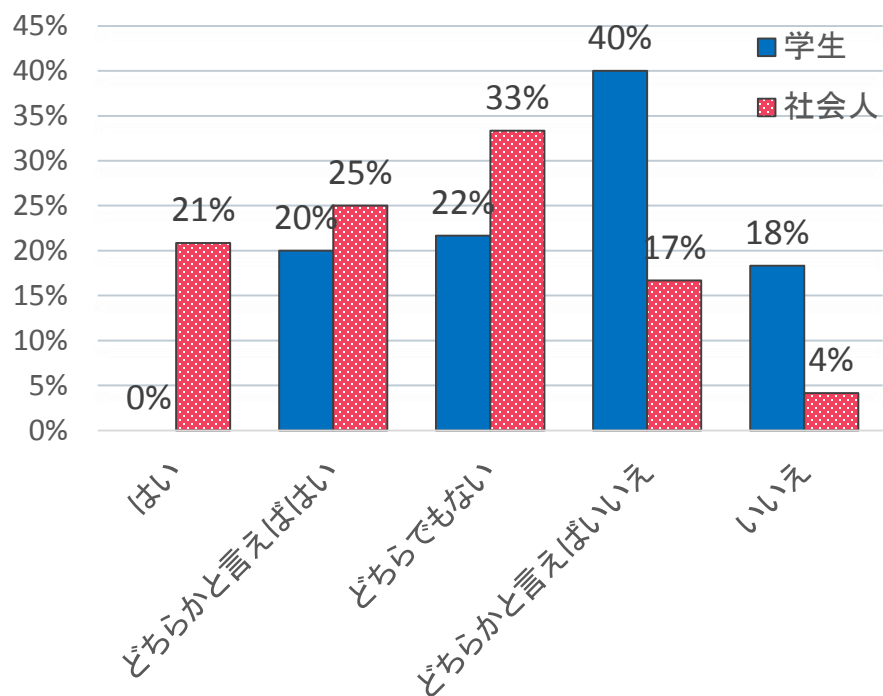
結果1 自立概念について



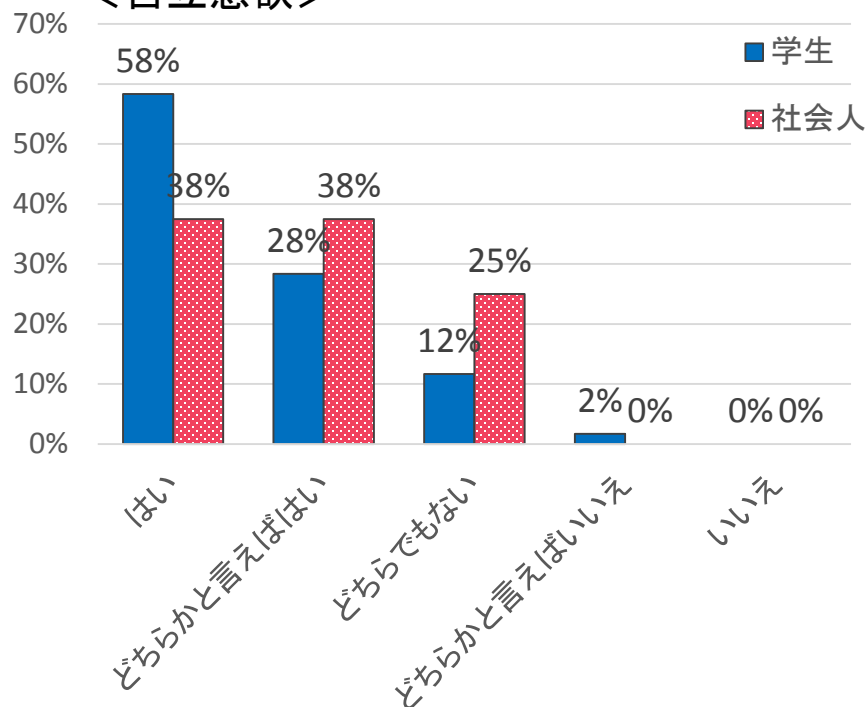
精神面	自分の意思・意見を持っている人 自分なりの価値観を持っている人 自分の夢や目標を持っている 芯がある、周りに流されない人
経済面	自分で稼いだお金で生活している お金の管理ができる人 金銭感覚がしっかりしている
生活行動面	身の回りのことを一人でこなせる人 自己管理ができる人 社会的なマナーを知っている
対人関係面	感謝できる人 周囲の人を気遣える 上手く周囲の人に頼ることができる

結果2 自立意識について

＜自立評価＞



＜自立意欲＞



結果3 自立の実態について

因子	全体 平均 SD	大学生 平均 SD	社会人 平均 SD	t 値
I 主体性	3.80 0.68	3.66 0.69	4.17 0.50	3.26**
II 経済的自活	2.63 1.14	2.02 0.62	4.17 0.55	14.76***
III 社会的関心	3.18 0.85	3.03 0.88	3.55 0.69	2.61*
IV 適切な対人関係	3.79 0.58	3.71 0.61	3.99 0.45	2.05*
V 家事能力	3.96 1.09	3.88 1.12	4.18 0.99	1.15
VI 親との信頼関係	4.17 0.57	4.13 0.63	4.26 0.42	1.11

* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

結果4 自立と文化的自己観の関連

- ・ 相互独立的自己観と自立得点は正の相関が見られ、
相互協調的自己観と自立得点は負の相関が見られた

	平均値	標準偏差	相関係数
相互独立的自己観	3.20	0.60	<u>0.370**</u>
相互協調的自己観	3.71	0.55	<u>−0.266*</u>

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

相互独立的自己観: 自己主張できることや独立していることが大切な価値観であり、他者と異なることが重視される

相互協調的自己観: 自己は他者や周囲のものと結びついており、他者との良い関係を維持することが重要になる
(Markus, Kitayama 1991)

考察

- ・ 就職が自立のタイミングの一つであると考えられる。
 - ・・・しかし、働くということは自立を決定づけている要因の一つにすぎない。
- ・ 自立には対人関係に関する側面よりも、自己を確立するような個人の心理・行動面が強く関連していることがうかがえる。
- ・ 他者との関係性や周囲との調和を意識する日本の文化ならではの自立概念が存在するのではないだろうか。

ご清聴ありがとうございました